

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2013年12月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



中土井鉄信の「地域一番の繁盛塾になるための最強法則」 vol.22

## <コミュニケーションが塾の仕事!>

この忙しい 12 月の時期に退学者が続出しているなんて塾はありませんか。9 月から 12 月にかけては、中学 2 年生の退学が多くなる時期です。しっかり生徒と向き合っ  
て、コミュニケーションをとり、子どもたちの心の居場所としての塾を確立したいものです。今回は、コミュニケーションについて書きたいと思います。

私ども MBA の持つノウハウや提案が、他の教育コンサルタント会社や個人の学習塾コンサルタントの方よりも圧倒的に優れていることがあるとすれば、それは、「子ども  
の心理的な理解に関することだ」と私は手前味噌ながら思っています。私の教育観は、非行少年の心的な構造の研究からスタートしていますし、弊社の井上は、アドラー  
心理学やコーチングを学びながら、子どもたちや教師を育成してきました。

そして、実戦経験で言えば、私は、約 5,000 名の卒業生を出していますし、井上は、約 300 名の塾教師を育成し、自分自身も、1,000 人単位で卒業生を出しています。おそらく、これだけの量と学的背景を持っている教育コンサルタントはなかなかいないだろうと思っ  
てはいますが、皆さんの MBA に対する評価はどうでしょうか。「大したことないよ!」なんて評価かもしれませんね。めげずに頑張っ  
てやっていきます。

さて、本題です。コミュニケーションで使われる言語には二重の構造があります。それは、デノテーション(表現)とコノテーション(含意)という構造です。人間は、潜在意識の領域と顕在意識の領域を持っていますが、その側面に対応するものが、このデノテーション(表現)とコノ

テーション(含意)なのです。

私たちが、他人と接している領域は、顕在意識の領域が圧倒的に多いのです。言葉で言えば、デノテーション(表現)と言われる領域で接しているのです。この顕在意識=デノテーションは、言葉そのものですから、私たちは、この言葉を鵜呑みにするか、それとも、この顕在意識を支えている潜在意識=コノテーションを受け止めるかによって、その人に対する理解の深さが変わってくるのです。

たとえば、先生と生徒の例で言うならば、「勉強なんかしたくない!」という生徒の言葉(顕在意識=デノテーション)をそのまま鵜呑みにして「勉強したくないんだ」と受け止めるか、「勉強なんかしたくない!」と言わせている意識(潜在意識=コノテーション)を受け止めるのかで、その生徒に対するアプローチが違ってくるということです。

「勉強なんてしたくない!」という言葉(=デノテーション)を鵜呑みにすれば、私たちは、「こんな大切な時に、そんなふざけたことを言うな!勉強しなければ、合格しないだろう!」と叱責することになってしまいます。

しかし、「勉強なんてしたくない!」という言葉のコノテーションを意識すれば、私たちは、「彼(彼女)は、なんでこんな表現をしたのだろうか?」と、言葉の背景に耳を傾け、「どうした?何か勉強で不安なことがあるのか?」とコミュニケーションがスタートするのです。どちらのコミュニケーションが、私たちの目指すものなのか、一目瞭然です。

私たちは、往々にして、言葉をそのまま受け取って、反応してしまう傾向が強いので、教師という立場で、「教育と

いう建前で忠告し、「教育という建前で意見を述べてしまう」のです。ところが現実には、そんなデノテーション（顕在意識）では、生徒の心的な矛盾や葛藤は解決されはしないのです。それどころか、そんな顕在的な反応では関係が悪化してしまう恐れもあるのです。

学習塾の教師として、教育のプロを自認するのならば、子どもの潜在的な思いを汲み取って、子どもや保護者に対応＝コミュニケーションすることです。「勉強なんかしたくない!」という子どもは、心の中で何か葛藤や矛盾を感じているのだと思います。子どもの心に関心を示すことです。さもないと、他者理解は、貫徹しないのです。

徹底的に子どもを、保護者を、理解することが繁盛塾になるための必須条件です。そのためには、言葉を手がかりにして、子どもや保護者の潜在意識(=コノテーション)の領域にまで、関心を持ち、理解をすることです。「この先生は、私のことをしっかり理解してくれている!」そう子どもや保護者が思ってくれることが、私たちにとって大切なことなのです。そのために、コミュニケーションをしっかり取るのです。

学習塾が、地域の教育コミュニティーになるためには、子どもの心的な理解が欠かせないと私は思います。数多くの塾を訪問して一番強く思うのは、子どもや保護者を理解しようとしている塾に、生徒が集まるといことです。ぜひ、カウンセリングの本を読み、流分析の本を読み、教育実践記録を読んで、心理的な枠組みをもつようにしてください。これからの時代は、心的な悩みを抱える生徒や保護者や職員が多くなっていきます。そんな環境にしっかり対応できる塾でいたいものです。

**【あとがき】**

MBA では、教育に携わる先生、保護者向けに、無料のメルマガを発行しています。

「塾経営の戦略・戦術エキストラ」「考えるヒント・今日の言霊」「子どものやる気を引き出す親のアプローチ」「中学英語で世界をつかむ!」「教育記事から教育を考える」です。

気になるメルマガを是非ご購入ください。

登録はこちらから

↓ ↓ ↓

<http://www.management-brain.co.jp/subscribe>

**【資料請求・お問合せ先】**

(資) マネジメント・ブレイン・アソシエイツ

<http://www.management-brain.com/2013/>

電話 045-651-6922 (10:00 ~ 19:00)

e-mail: [mailadm@management-brain.co.jp](mailto:mailadm@management-brain.co.jp)



作文指導の醍醐味に、書くべきネタの吟味があります。さして説得力のない主張や自身の経験談をだらだらと書く生徒がいますが、そういったものを一掃してしまうことが先決です。「ひとまず書いてみましょう」という作文指導は、質の悪い作文を量産させることにつながるので、避けるべきでしょう。

具体的に考えていきましょう。

次の問題は、2013年度山口県立高校入試で出題された国語からの抜粋です。

次の会話は、出会いに関する話し合いの一部である。これを読み、司会者の発言に着目して、あなたにとっての大切な出会いについて書きなさい（160字以上240字以内）。

- Aさん 私にとって大切なのは、近所に住んでいる、あるおばあさんとの出会いです。地域の文化祭で書道の展示作品を見ているときにその方と知り合って、それ以来、ときどき書道を習うようになったのです。
- 司会者 それでAさんは字がきれいなのですね。他の皆さんはどうですか。自分にとっての大切な出会いについて、具体的に話していただけますか。
- Bさん 私の場合は、人との出会いではないのですが、中学校一年生の時に買った腕時計との出会いが、自分を大きく変えるきっかけになりました。私はその腕時計のデザインがとても気に入っていて、いつも身につけているうちに、自分で時間を気にしながら行動できるようになったのです。
- 司会者 なるほど。これまでに経験した様々な人や物事との出会いを振り返ることで、自分の成長や変化をみつめ直すことができそうですね。

リード文の最後だけを読むと、えらく自由な作文問題だと思ってしまうがちですが、「司会者の発言に着目して」という一言で、状況は一変します。まずは書くべき内容を整理してみましょう（問題文中より、書くべき内容を読み取ることが作文問題の第一関門といえますが、今回はそれについて詳述しません）。

- 1 自分が今までに出会った人（または物事）で、自分が大切だと思ったことを具体的にまとめる。（基本方針）
- 2 出会った人（または物事）を書く。
- 3 なぜそれが大切だったかを書く。
- 4 司会者が述べている「自分の成長や変化をみつめ直す」という言葉に従い、その出会いにより、自分がどのように成長したかを書く。

このようにまとめると、書くべき内容がはっきりして「さして説得力のない主張や自身の経験談をだらだらと書く生徒」は激減します。しかも、高校入試の場合、作文問題の字数



が 200 字前後で、公立中高一貫校入試の半分程度（またはそれ以下）というのが相場です。「制限字数が少ないほど、作文は書きづらい」と言われるように、少ない制限字数に縛られて、書くべき内容をまとめきれないのです。

ということで、これだけ書くべき内容を絞り込まれると、何人かの（多くの？）生徒は作文そのものが書けなくなります。そういう生徒は得てして「何を書いたらよいかわからなくなった」と言って悩みます。

しかし、この疑問そのものが大きな誤りです。なぜならば、作文では「これを書く」とよいの「これ」に当たるものが存在しないからです。もちろん、書くべき内容は制限されていますが、先の例で言えば、「最初に出会った人（または物事）」の判断は、生徒に委ねられています。

そこでまずは、「何を書いたらよいかわからない」または、「書きたいものがないから書けない」という考えは誤りだと生徒に自覚させることが大切です。「書きたいものを書くのが作文ではない」と伝えます。書きたいことがなくても、作文は書けます。

作文とは、「書きやすそうなものを自分なりに決めて書く」ものです。ただ、それだけです。

たとえば、「あなたの尊敬する人について書きましょう。」というテーマが与えられた場合、「尊敬する人がいないから書けない」と言う生徒がいますが、そもそもその考えが誤りです。尊敬する人がいないのならば、その場で、「じゃあ、今日は、尊敬する人を『自分の両親』と決めて書こう」と思えばよいだけです。身近な人を尊敬する人にすれば、多少なりとも説得力のある理由や具体例を書くことは可能でしょう。

真剣に、自分が尊敬する人について考えてみることは大切ですが、試験中にそんなことをまじめに考えていたら、あっという間に時間が過ぎてしまい、白紙で提出…という結果になりかねません。だから作文は、「書きやすそうなものを自分なりに決めて書く」のです。

同様に、先の例で言えば、「最初に出会った人（または物事）」をまず始めに一つ決めるのです。もちろんそれは架空の人物で一向に構いません。オメガの腕時計を祖父の形見と仮定してもよいでしょう。「書きやすそうなものを自分なりに決めて書く」だけなので、そこに事実の有無は問いません。もちろん、虚偽記載で訴えられることもありません。作文は事実の有無を問わないのです。

そもそも、出題校や各都道府県教育委員会が発表する解答例は、すべて創作文に過ぎません。事実からは無縁です。作文に事実を求めるという姿勢から生徒を解放してあげることが、指導者には求められているのだと思います。